スクールカウンセラーだより　No.10

令和6年2月

SHONAN GAKUIN HIGH SCHOOL

スクールカウンセラー　中野隆治

「冬来たりなば」

冬が来ると決まって思い出す言葉があります。「冬来たりなば春遠からじ」という一句です。かつては何かのことわざでもあるかのように思い、「寒く厳しい冬がやってきたということは、暖かい春はもう目の前にまで来ている、辛い時期があってもじっくり耐えていれば、やがて幸せな時を迎えられる」‥‥‥こんな風に解釈していました。ところが、よく調べてみると、この句は、あるイギリスの詩人の、民衆を励ます詩の一部分だということが分かりました。こんな風に、詩人は、その長い詩の最後のフレーズで表現しています。

……

予言のラッパを吹き鳴らしてくれ！おお、西風よ！

冬来たりなば春は遠からじ、と。　　（パーシー・ビッシュ・シェリー『西風に寄せるオード＜歌＞』）

イギリスの中世の頃、若くしてその詩才を称(たた)えられながら海難事故で亡くなった詩人が、当時、封建制や身分制度に苦しめられていた民衆を励ますために作った詩でした。冬は厳しいもの、辛いものとして認識されがちですが、シェリーは、冬をやがて来る春の前触れとして捉え、人々を鼓舞(こぶ)したことがよく分かります。

一方、冬を自分の力だと宣言した詩人もいます。『智恵子抄』や『道程(どうてい)』で知られる高村光太郎です。

……

冬よ

僕に来い、僕に来い

僕は冬の力、冬は僕の餌食(えじき)だ

……　　（高村光太郎『冬が来た』）

冬を自分の生きて行く活力にし、大手を広げて迎える詩人の強靭(きょうじん)な意志が、このフレーズからは感じられるのです。

みなさんにとって、冬はどんな存在でしょうか。もしかすると、冬は寒く厳しいものという固定的なイメージに自分を慣らしてしまっているのではないでしょうか。シェリーの言うように、冬を、やがて来る春を待ち望みながらも、しっかりと実力を貯え、春に向かって実力を発揮する時期だと考えられないでしょうか。冬を避けるのではなく、高村光太郎の言うように、冬と手を握り、冬を自分の力として、実力をしっかり貯えてほしいと思います。

春はもう、すぐそこまで来ているのです。